

# 回心の伝統

——和讃の諸問題——

金子大榮

今日は『高僧和讃』の諸問題として、第二に法と人、或いは人と法、人と法ですな。或いは七高僧の領解、領解と人柄、領解と人徳ひととくということであつてもよろしい。

昨日は伝灯でんとうということいろいろ話したのでありますが、考えてみますと昨日話したことは、必ずしも『高僧和讃』でなくとも、『教行信証』においても一応言えることであります。ただ、七高僧の『高僧和讃』の上におきましては、七高僧すべて仏教の正意を明らかにするものである。即ち釈尊の精神を受け継ぐものであるということ、それからもう一つは、弥陀の化身であるということでありました。この二つは和讃でないとはいきりしないことのようにありますけれども、それとて『教行信証』でも言うことであります。とすればそれは『高僧和讃』において、初めてはっきり考えさせられることになったのは、したがって、七高僧の人柄と、それからどういことを説かれたか、ということと、いずれが主であるかということでもあります。

昔から七高僧を選ばれたことについては、昨日も言いましたように發揮の説というのでありまして、この七人の方によって新たに説き出されたものがそれぞれあるのである。それは龍樹菩薩においては難易二道、天親では一心五念、曇鸞では自力他力、道綽では聖道淨土、善導では凡夫入報、源信では報化二土、それから源空、法然では信疑決

判と挙げてあります。これは昨日も申しましたかな。『七祖交際弁』という書物がありまして、それなどもそれぞれこのことを述べてありますし、それでなくとも人の事を説くのは必ずこのように言っているであります。だがどうしてその人の上にこういうふうなそれぞれの發揮の説というのが出てきたのであろうか。なにが龍樹をして難易二道ということを説かしめ、乃至法然をして信疑決判ということをせしめたかというところ、そこにはそうせずにはおれなかったそれぞれの人々のいわゆる求道心というものがあつたに違ひがない。したがってこの發揮の説の上には求道、道を求めてそしてある意味において回心せられた。求道ということは一つの回心。回心という事はただひとたびあるべしというようなふうに重く考えますと、又難しいことになります。方向轉換というほどの意味に解釈しますとすれば七高僧の上においては皆方向轉換があつたのである。だから、求道回心ということが、それが發揮各説ならしめたものである。

難易二道ということが龍樹菩薩によって説かれたものとしますれば、龍樹が仏教を求めている間に、難行道・易行道というものを見出して、そうして難行では仏になることは難しい、「易行の一道である」とこう言われたところに、龍樹その人の求道心があり、又そこに回心がある。難行を捨てて易行につこうではないかという回心があるに違ひがない。それは天親菩薩の一心五念のうえにおきましても、和讃で照してみますというと、龍樹のところには、

龍樹大士世にいでて

難行易行のみちおしえ

流転輪廻のわれらをば

弘誓のふねにのせたまう

ところあります。そうすると龍樹大士世にいでて、難行易行の道を説いて、そうして我等の為に如来の本願というものを説かれたのと言っております。

天親菩薩の場合におきましては、はなはだ不明瞭でありますけれども、しかし和讃の上に見ますというと、

釈迦の教法おおけれど

天親菩薩はねんごろに

煩惱成就のわれらには

弥陀の弘誓をすすめしむ

とあります。そうしますと、釈迦の教法は多いが我等の為に弥陀の本願を説かれたのである。こういうことが、それは衆生を導くためという形で述べてありますけれども、何かそういうところに天親菩薩の求道心があったに違いない。広く仏教を学ばれたのでありますが、「煩惱具足の我等」と天親を除いてのことのようでありますけれども、恐らくそうでない。天親自身も煩惱具足の我等と一つになって、そして釈迦の教法を多く知っているけれども、親鸞の押さえには、弥陀の本願でなくてはならないということを、自分でなしに、煩惱具足の我等の為にと説いてあります。そこに一つの求道心があり、回心があるに違いがない。

曇鸞にいたっては、曇鸞讃の始めの方に、

本師曇鸞和尚は、

菩提流支のおしえにて

仙經ながくやきすて

浄土にふかく帰せしめき

とあります。仙教を焼いて、そして浄土の法に帰せられたと述べてありますが、曇鸞大師にとりましては、菩提流支に遇って、仙人になる御経を仙經を焼き捨てられたということは大きな事件であったと言っているではありません。和讃では「四論の講説さしおきて」と、こうあります。曇鸞大師の教学は四論の講説で、龍樹の思想を受け継いでお

られたものであります。しかし、伝記のほうでは『大集經』の解釈をしようとせられたのでありますが、この經を解釈するためには、まず健康でなくてはならない。弱かったんでしょね。それで、健康法として仙人の思想を学んで、何としても長生きしなければ本当のことはできないということで、仙教を求められた。それが、菩提流支に出遇うて「仏法にも長生きする法がありますか」というような、きわめて平凡な問いを出したんですが、菩提流支は「そんなばかな」ということで、どんなに長生きしてもやがて死ぬのである。真実の長生不死の神方は仏法よりないと言われ、翻然として悟って、仙教を焼いて、それから専ら仏法の研究をされたということになっておるのであります。

ですから、曇鸞大師の教学は大体四論宗なんでありますけれども、『浄土論』を解釈して行かれたということは四論の講説をさしおいて、そして本願他力に帰せられたものと言わなければならない。

ついでに言うときますが、菩提流支が曇鸞に向かって、これが長生不死の法ですと言って与えられたのが『観無量壽經』であるということでもあります。ところが、誰であったか『支那仏教史』読んだ時に、『観經』では時代が合わないということでもあります。どうも『観經』という御経はその当時非常に広く中国に広まりましたので、菩提流支が曇鸞に与えたのもたぶん『観經』であるということだったんであろうが、恐らくそうではあるまい、菩提流支が『浄土論』を翻訳したんだから「私は今この『浄土論』というのを翻訳しておる。これをご覧なさい」という事で曇鸞に授けたものは『浄土論』であったに違いない。そうなりますと曇鸞はその『浄土論』を授けられたのであると、こう言っとる人もあります。その内、中国の仏教史も色々進んでおりますから、やっぱりそうでない『観經』であったんだというような説もあるようですが、そういうことになりましたという、歴史の研究も相当に大事なものであります。菩提流支の授けたものは『観經』であっても、曇鸞が解釈しようと心掛けたものは『浄土論』であるということであっても無論差し支えないのであります。

そしてその『浄土論』を解釈するのに龍樹の四論の、四論的論法でもって、『浄土論』を解釈しておるんであります。

すからして、「さしおきて」というてありましても、四論専門にということをやめてしもうて、そうして浄土の法を領解せられたという所に意義があるのでしょうか。

いずれにしても曇鸞大師の和讃の上において、曇鸞の自力他力というようなことを言われたことは、たしかに一つの回心である。曇鸞大師の求道心の方向転換であるということははっきりわかることであります。

道綽禪師にいたってはこれほど明瞭なものはないんでありまして、道綽禪師によって聖道と浄土というのは分別された。今日、聖道門・浄土門というておりますけれども、その聖道浄土二門ということは、まず最初に明らかにしたものは道綽禪師であります。そして「此土入聖」でこの世で悟りを開くということは、どうしても駄目な事であるからして、我等は浄土を願うよりほかはないという、そこに一つの転換があります。即ち求道心が回心したのであります。

善導大師の凡夫入報ということは、凡夫でも報土へ生まれることができるという、そこに善導の回心と言いましうか、善導には二種深信あり、殊に二河白道の譬えというものがありませんからして、あの譬えを読めば善導の求道心というものが、それが道綽の精神を受け継いで、そして浄土を願うよりほか、道がないんだということを明らかにしたことは言うまでもないことであります。

源信にいたりましては、そういうようなことははっきりしませんけれども、しかし『往生要集』を読めばね、何故に地獄のことなどを説いたりね、厭離穢土欣求浄土というものを説いたり。殊に源信僧都は『称讃浄土経』の講義を引き受けて、御褒美をもうて、お母さん喜ぶだろうと思うて、お母さんにやったところが、母親に叱られたという話もあります。何かそういうような所に求道心というのがある、そうしてその求道心というのは、まったく自分の為に道を求める他はないんであると、いうことになられたに違いないであります。法然上人にいたっては、伝記の上において明らかで、四十三になって愚かなもののためにこの法があったのであると言っております。

従って発揮の説というのは、どうしてそういう発揮の説ができてきたかという、みなそれぞれの求道心による回心、その表れであると考えていいんでありましょう。そうして、何がそういうふうに出揮の説を作り、或いは回心せしめたかと言えば、要するに煩惱具足の凡夫であるということでしょう。だから、七高僧の和讃を貫いてあるものは煩惱成就の凡夫であるとか、あるいは、生死流転の我々であるとかという言葉であります。それで私は、今更にはっきりしたことは、恐らく七高僧を聖人が選ばれたその理由の中には、発揮各説だとか或いは書物があるとか、安心同一とかと、色々言うけれども、もし私をして言わしむれば、三国の高僧伝を調べて、一々調べてみないと分りませんけれども、きちっと読んだこともないんですから、ちょっと大胆すぎますけれども、恐らく印度・中国・日本にわたって多くの高僧が出られたんでありますけれども、その多くの高僧の中で人間苦というものを感じて、そうしてその人間苦を通して煩惱罪障を離れんものであるということを感じてものを言うておられる方は、或いはこの七人だけであったんでないであろうかということです。

華嚴宗の祖師とか、天台宗の祖師とか、まあ偉い方がたくさん、しかしそういう人々の伝記を読みましてもですね、人間は苦悩の多いものである、罪障の多いものであるということを人のこととしないで、自分自ら感じ、自分自ら悩み、自分自ら罪の恐ろしさを感じてものを言うておられるという、それは恐らく七人だけなんでないであろうか。

まあその他にもあれば、またそれまででありますけれども。何かそういうふうに感じられる。従って本当の人間観、或いは人生観というものを主としていくのが仏法であるということならば、七人を取ってしまうと仏教の歴史は全く学問の歴史になってしまつて、本当の宗教の歴史というものではなくなるんじゃないであろうか。こんなふうに思うことでありますが、今日はそれが発揮の説の元であったのである。だから、龍樹だの天親だのという人の伝記の上には、はっきり何処で人間苦をこう感じられたかという事は明瞭ではありませんけれども、しかし、その発揮の説というのが出てきておるといふことは、そしてその発揮の説というものが、人の伝統というものを感しさせるものとなります。

ば、私の最初から思いましたことは間違いないことであって、それぞれの人間苦、人間苦は或いは個人的である場合もあります。或いは社会的である場合もあります。それはやがて第三、第四の問題になるんですが、七高僧において悪というものを感じられたものは、個人的であったか社会的であったか、まあ、そういうようなものは色々あるで  
ありましようけれども、要するに人間苦の経験というものが、それが発揮の説を作らしたものであります。

こういう点から申しますという、その教えを聞けばね、七高僧の御説を聞けば、どうしてもその人柄を思わずにおれないものがある。こういうことであります。

ところが、それも又そう思うて翻って見ますれば、或いは『教行信証』の上においてもあるかもしれませんが、しかし和讃においてはじめてはつきりと「釈迦の教法おおけれど」とか、或いは「涅槃の広業さしおきて」とか、「四論の講説さしおきて」とかいうふうなこう、その人徳ですね、その人徳を挙げてそして七高僧それぞれの御領解を明らかにしてあるということは確かに『高僧和讃』においてのみであると、こう言っているのではないであろうか、ということです。

私は、こんなことを思うのであります。一体、識者というものがどうして禅に行って、そうして念仏三昧になることができないのであろうかということであります。それは私たちのような人間には、とっても不思議なんであります。かつて広島に居った時かな、京都へ帰ってきた時かしらんが、非常に親しくしておりましたある哲学の先生に手紙をだして、その先生は私の書物などをよく読んでくださいましたし、亡くなった正親含英師のものなども親しく読まれた人であります。それほど念仏に親しみながら、何かというと禅といわれますが、どういうわけですか、と言ったら、その方は、「我々は学問しますから」という返事でした。そうすると、もう学問するというと、どうしても禅にならなきゃならんのであろうかとも思う。真宗の教えの中にもそう考えりゃ禅的なものは無いことはないのです。しかしながら念仏を本当に理解するためには、たしかに人間苦とか人間悪ということを、身に引き当てて感ず

る人でなきゃならないということがあるようであります。人のこととしてたぶんそうであろうということは、いわゆる識者ですから、物を知っている人なんですから、物知りというのは何でも知っているもんですから。けれどもその身それ自身が人間苦というものを経験しない限りは、頭を下げない限りは、もう自分の力ではどうにもならないという頭を下げなければ分らないというものが、それが真宗の本願念仏の法というものにあるようであります。これはもう嫌と言えないことでありまして、私も今はあまり付き合っておりませんけれど、前はいろんな関係でいろんな有名な人に御付き合いましたことがあります、多くの人がこう言います。私も四十までとか、五十までとか禅一つで行けると思っておったんですけれども、今日になってみるとどうしても念仏でなくてはならないと言われます。殊に人生経験が物をいうことであります。仏教というものは、まあ不思議なものです。若者でなければ分らない方面も一つある、もうお爺さんお婆さんになったらどうしたって分らないものも一つはある。しかしながら、同時に若い者ではどうしても分らない、年寄りにならなければ分らないというものもある、というようなことでもあります。つまり、その人の身になる。その人の身にならなければ、どうしてそういうことを言われるのであるかということは、分らないということがあるようであります。

それでちょっと一つ気がついたんですがね。今日親鸞と言えば、まず『歎異抄』ということになっています。これも『歎異抄』という書物は簡単であって、あれですっかり分りますからね。けれど『教行信証』というものがどうしてもっと広く読まれないのであろうか。インテリの人々は相当に読んでおるのでありますけれども、しかし『教行信証』によって親鸞を表そうとしないのです。すべて『歎異抄』によって表そうとするところには何かがある。それは人というものが、親鸞その人というものが『教行信証』ではあまりはつきり分らない。まあ、『歎異抄』なら分るということがあるんでないでしょうかね。「法然上人にすかされて地獄に落ちて後悔しない」というような、そういうふうなことは心して『教行信証』を読めば、『教行信証』もそうになっておると言えませんが、そういうことは



出ておらないのであります。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」というような、表現でのね。更には「慈悲に聖道浄土のかわりめあり」とか。或いは第九章に「念仏もうしそうらえども、踊躍歓喜の心おろそかである」とかというような、本当に人間に即しているというのが『歎異抄』である、こういう面も一つあるのではないのでしょうか。

昔、鈴木先生と、もう三十年も四十年も前かな、ある時に話した時に、その時に私が『教行信証』を大谷大学で講義して問題を起こした時なんだから、先生いくら私に同情しての意味だったかも知れませんが、「親鸞もね、『歎異抄』だけで止めとけばいいものを『教行信証』なんて難しいものを書くから問題になるんだ」と言われたことがあります。裏から云えば『歎異抄』一巻で親鸞を知るのに充分ではないかという御気持ちであったんではないかとも思うのであります。それも、今申しましたような気持ちで決着すれば、要するに人間が分らない。その人の説く所が心惹かれるけれども、その人間が分らない。或いは、その人の域になりきれないということが、それが真宗の法というものを、本当に了解してしまえないところの理由になっているんじゃないであろうかと、こう思うのであります。

ところが、『高僧和讃』を読んでもう一つ、もう一つその人徳というものについて、心惹かれるものがあり、そして問題となるものがあります。それは、七高僧の一人に曇鸞大師と、それから法然上人の御二人にしかないんであります。これはその徳を、こういう事を説かれたということではなくて、こういう人が説かれたんだという、つまり法よりも人の方が先であります。もっと具体的に申しますというと、法然上人の場合には、「上皇群臣尊敬し 京夷庶民欽仰す」と、つまり上皇、上皇群臣ですから、天皇とか或いは大臣とかいう者が敬うし、そうして京夷庶民と、京の人も田舎の人も皆庶民たちも皆、その御徳に帰依した事である。その次には、

承久の太上法皇は

本師源空を帰敬しき

釈門儒林みなともに

ひとしく真宗に悟入せり

と偉い人だったんだという。偉い人だったということは、当時の帝も尊敬し、同時に京夷庶民も欽仰したことである。

源空しやうくわん光明はなたしめ

門徒につねにみせしめぎ

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし

と、更には光明を放たれたと、こういうようなことを言うておられます。

本師源空のおわりには

光明紫雲のごとくなり

音楽哀婉雅亮にて

異香みぎりに咲芳す

と、光明放ったとかね、おわりの時には紫雲たなびいたとかいうようなことが言っております。

曇鸞大師の方はそういう記事はないんですけども、しかし、始めの方には何首も何首も、梁の天子がですね、「世俗の君子幸臨し、勅して浄土のゆえをとう」というところから始まりまして、

魏の主勅して并州の

大巖寺にぞおわしける

ようやくおわりにのぞみては

汾州にうつりたまいにき

魏の天子はとうとみて

神鸞とこそ号せしか

おわせしところのその名をば

鸞公巖とぞなづけたる

浄業さかりにすすめつつ

玄忠寺にぞおわしける

魏の興和四年に

遙山寺にこそうつりしか

六十有七ときいたり

浄土の往生とげたまう

そのとき靈瑞不思議にて

一切道俗帰敬しき

此にやはり靈瑞がある。

君子ひとえにおもくして

勅宣くだしてたちまちに

汾州汾西秦陵の

勝地に靈廟たてたまう

こうなんでしょう。つまり十首も時の帝が敬意を表されたということがあって、それから色々と領解のことが述べてあって、また一番最後にいって念を押して

本師曇鸞大師をば

梁の天子蕭王は

おわせしかたにつねにむき

驚菩薩とぞ礼しける

とこうであります。どう思いますか。何かこう親鸞聖人は理性的な、そして宗教的にしましても、感情が純粋な人のように感じております、そこへ紫雲たなびいたことの、光明放たれたということが有難そうに書いておられると、やっぱり聖人も有難屋であったかなというような気持ちもするんでないでしょうか。

しかしそこに、まあそれでも私はいいんだと思います。その時代その時代の感じがありますし、殊にここら辺りの庶民と同じ、庶民と同じ関係があって、「光明が放たれた」とか「紫の雲が漂った」とかいうところで有難さを感じられておるんであると、こういった方がいいんだろうと思います。

これをもう少し考えてみますというと、いろんな問題があるようであります。いったい私たちはどうなんだろう。私たちはまずその思想を知って、そうして後その人を知ろうとするのであろうか。それともその人を知ってからその思想を知ろうとするのであろうか。おそらく両方とも揃わなければいかんのであろうかと思えます。或る人は京都に尋ねる。で、京都に尋ねるというと色々ないわゆる名所を尋ねる。彼はこういうことを言う。名所を尋ねるはその人に遇わんが為である。名所を尋ねるのはその思想を聞かんが為であると。こう言いますというと、人に遇うということ、その思想を聞くということは別なことなんじゃないかな。

思想的には優れておるんだけど、人間に会うというとあんまり宗教的な感じがしないということもあるんであ

ります。すると宗教的であるということは、その人に接する時の感じと、人格的なものなのであろうか。それとも思想的なものなのであろうか。私などはどちらかというと、いろんな書物を読むんですけどもね、その思想の方だけに気を取られてしまうて、その人はどういう人であるかということとはあまり研究しない。それがもう、ずいぶん困ったことがありますて、それで通して来て居るんでありまするが、どうもそれも本当でないようであります。

その思想が優れおって、そして自分を感化するならば、こういう感化を与える人の一生はどんな一生であったかと、その人を尋ねるといことが、それが普通なことであるかもしれないんであります。実際我々が仏法を求めるのは、結局そういう順序なんでしょう。思想的に感化を与えたからその人を知ろうというのであるか、或いはその人の名声が、名前の方が「あの人は偉い人なんだよ」というようなことで、大学の総長さんだというようなことを言ったり、或いは日本の識者としては代表的な人だ。それなら聞こうかと言うのはいいんだけど、先ですか。こういうと名前の方が先で、まず名前の方が先で、そうしてその思想の方がむしろ後回しになると、いうことも実際のようであります。そういうと何か名前というものを、例えを言えばはつきり分らんようでありますけれども、しかしこういうことがあるんですよ。名というものは実に伴うものである。実に伴わない名は虚栄である、虚名である。いわゆる名誉心が強いということは、実に伴わない名でしょう。実力がないのにもかかわらず、その名前が欲しいというならば、これは実に伴わない名でありまして、名前などはどうでもよい、実でなくちゃならないことがあってあります。

しかしまた、こういうこともあるのであります。名は実のうえに、実は名のうえに、実は名のうえに実現する、実と言いますけれども、その実はなくなつて初めて実は成就するのである。阿弥陀の本願でもそうでしょう。光明無量・寿命無量とは阿弥陀の実であります。諸仏称名は名であります。けれども光明無量・寿命無量だというてみたところで、光明無量・寿命無量にならない。それが南無阿弥陀仏という名になった時に、そこに実が成就する。実が名に

伴うという部分もありますけれども、かえってまた実は名において実現するということが、これは真宗の場合によつては非常に大事なことであります。だから、名前にとらえられてはいけないということもありますけれども、その名前を重んじるということが、また非常に大事なことであります。名譽を求むるということは、つまらんことであるかもしれませんが、名を重んずるということは、非常に大事なことであつて、名を惜しむということもありますわね。いたずらに自分の名を出るということは恥ずべきことである。名ほど尊いものはないのであるからということもあるのであります。

だからして、そういう点から言えば、梁の天子が尊まれたとか、或いは光明紫雲の如くであつたとか、そういうようなことの上に、それぞれの御徳が現われておるのであると。こう了解すればまたそこに自からなる感情としてですね、聖人が庶民と同じ心になつて、そして紫雲のただよつたことやら或いは光明を放たれたというようなことを、讃えておられる気持ちもですね、決していわゆる偶像崇拜的なものでない、むしろそれこそ庶民の心を代表するものであると、こう言つていいんであります。

ところがそれにいたしましたも、「京夷庶民欽仰す」というのでありますから。それはわかるんですけれども、「上皇群臣尊敬し」とか、或いは曇鸞大師の場合には、始めからしまいまで「梁の天子」という天子というものを出してこられたというところに、もう一つ考えておいていいものがあるんじゃないであらうか。

国家意識というものが私らの上とも関係あるんです。その国家意識というものが、それが公というものを、いわば象徴しておる。公なるものと、公と共だね。今日の思想は共にであつて、公はユニバーサルであり、共はジェネラルであります。今日、国民の皆様のためにとかいうようなことを言いますけれども。要するにそこに喜んでそれに従うと、一つの法が定まったならば、良い法ができたということ喜んで従うという、そういう感じというのが今日乏しいのではないであらうか。

そうする、そうすればいいなことであって。喜んで悦服するというふうな、そういう気持ちというのは、公というものの上にあったのであります。日本を滅ぼしたものは、公の、いわゆる天皇政治でなくして、官僚政治であったということは、話せといえはいくらでも材料はあるんですが、戦争の上にもそういうふうなものがあつたんでないであろうか。だから、戦争を語る人は、農民を代表して、そうして時の権威者に反抗した面があるんだと識者達がいうのであります。親鸞を語る際にもこれを言うのであります。そういうようなことがあつたかもしれませんが、しかし、そのような権威者というのは、守護とか地頭とかいうようなものでしょうか。そういうものに対して農民を代表して、そして時の権威者に反抗するというものがあつたんだ、いうようなことを言いますが、材料があれば問題になりませんけど、私には考えられない。そういうことがありましても、何かその上に、「朝家の御ため、国民のために、念仏もうさるべし」ということが『御消息集』にあります。ああいう言葉でも、あの時の都合でそういうことを言われたんであると、こういいますけれども、そう簡単に言えないと思います。「世の中安穩なれ、仏法広まれ」と、こう言われるところには、仏法広まるという事において、世の中が安穩になるんだという何かが、何かが考えられておったにちがいない。で、そのためには、朝家のために念仏申すのであるというようなものがあつたんでないであろうか。

その点におきましても、仏教というようなものと、それからキリスト教というようなものとの違いがあるんでないであろうか。キリストの方は良く知りませんけれども、大体始めから庶民を代表しというようなもので、宗教思想そのものが始めから民主主義的なものであって、そして権威者としてのそれに反抗するというようなものがあつたんでないであろうか。どちらが強いかわいまいかというようなことでない。どちらが善いか悪いかということでない。とにかく、仏教というものの、そして真宗というものの、親鸞聖人の思想というものの中には何かそういうものがある、それで「上皇群臣尊敬す」とか、「京夷庶民欽仰す」、或いは梁の天子云々というふうには言わなければならな

い。『御伝鈔』でも「それ聖人の俗姓は」と「天児屋根尊」から説かなげりやならんということに、そしてきわめて理想的であるかもしれないけれども、庶民の心ある者が、それが帰依者である。

十七条の憲法を見ましても、君に忠なるものは、民に順でなくてはならない。また、民に順でないという事は君に忠でない。戦時中に随分それを説きましたのでありますが、ようそんなことを言って処分されなかったと今では笑われておるんでありますけれども。なんせあの時分の官僚というのは、民に順でない、民を忘れて忠に生きるということとを考えようとしませうけれども、そんなものは本当の忠でない。君に忠とは、民に順であるということがない。だから、本当に庶民を愛するということに、そこに公の道というものがなくてはならないんだということです。そういう点において、或いは仏教というのは、そういう公の思想というものと運命を共にするようなものがあるんじゃないかと、こう思うのであります。

そういうことは、『教行信証』でも、最後の後序というものを見ますというと、何年、何年と言って、そして天皇の名前を並べてね。そして「主上臣下、法に背き義に違し」と、法然上人が流罪になられたという事で、怒りを以て述べておられるようでありますけれども、あれとて反抗思想というようなものではないのでしょうか。反抗思想というようなものではないんでありませんか。ああいうことにも、そう言わざるをえないところに、何か、国家愛というものがあつたように思うのであります。

国家を愛するものは世界を愛するといふうなことではなくてはならんはずなのが、国家は愛するが、世界はどうでもないんだといふうになつたところに、右翼思想というものがあつて、左右両翼を越えての何かがあるように思うのであります。そういうことも、聖人の時代感覚であると言えば、それまでであります。それでもけっこうなんですけれども、『教行信証』においてあまり明瞭でないことが、和讃を読んでみると、そういうことが出てくるということを考えていいのじゃないかと思うのであります。



これで、『高僧和讃』をとらまえて感じられる人というものです。繰り返して申し上げますが、我々は実に伴うところの名を求めますけれども、或いは名に実現する実というのがあるのである。あの戦争の真最中に、親しい蜂屋賢喜代という人がいましたが、その人が大阪の士官に行つて話をせられた。そんな時になんとか、名前忘れましたが、蜂屋さんの話を聞いて、「真宗の話は分ります。実は名に現れなきゃならんという話はいかにも御尤であつて、自分は馬上に居つて、指揮を取る。自分が刀を振るうて指揮をしなければ兵卒が動かんようでは駄目だ。名前だけで動くようにならなきゃだめだ」と言つたというものであります。

大谷大学もまたそうなんでありましてね。大谷大学の名において、大谷大学の名において動くというようなものがないではならない。実、実と申しますけれども、実はその名の上に、大谷大学という名が御利益をもたんにしたならば、もう大体駄目なんでしょう。大谷大学という名が、貴方たちには分らんかもしれないけれども、相当にできておるんであります。おそらく清沢満之というような先生が出られたということも、大きな理由になつておるのか知れませんが、今ではもう變つてしまつてしょうけど、かつては文部省あたりでも大谷大学であるというものであれば、その名において随分敬意を表したもんだそうですね。

西田幾多郎氏あたりでも大谷大学の名において、大谷大学を愛されたのであります。それが、「大谷大学か、あれは駄目だ」ということになつたならば、要するに偉い人間が幾ら出てもおつつかんということになるわけだね。だから自分の名前を、自分が実力をつけるということは、やがて自分の名前を出すと言へば、出身地の大谷大学の名を明らかにするということではなくてはならない。

他の話でありますけれども、こないだの同窓会で、同窓に話をしてくれという注文がありました。だから私は同窓に希望すること、「我は大谷大学出身者なり」ということをどんな場合でも誇りを以て言うことができなきゃならない。それが一番望ましいことである。出身校を問われて、そして本当に誇りをもって「我は大谷大学出身者なり」と

言うことができようじゃ、その人がどれだけ偉くても、もう一つ足らんものがあると言っていいんでありましょう。こういうわけにありますからして。梁の天子が敬意を表されたとか、或いは「上皇群臣尊敬し」だとか、或いは光明放たれたとか、紫雲たなびいたとかいうふうな、いかにも庶民的なことが歌うてありますけれども、そこにもう一つ、我々が考えていかなきゃなんものがあるのではないかと思うのであります。それが『高僧和讃』によって与えられた第二の問題であります。こうしておきまして、然らば、その七高僧というのは教えの上にどういう特徴があるかということ、第三、第四の問題としようと思います。

（本稿は、昭和四十五年九月二十一日の大谷大学における講義、「和讃の諸問題」の筆録である。文責編集部）

執筆者住所が掲載されているため  
リポジット非公開とする。